

ライバルイチョウ ～ 「矢神のイチョウ」と「天神のイチョウ」の歴史 ～

佐藤 征弥 (徳島大学総合科学部)

瀬田 勝哉 (武蔵大学人文学部)

1. はじめに

徳島県石井町には県の天然記念物に指定されているイチョウが二本あり、ともに幹の周囲が 10 m を超える目を瞠る巨樹である (幹周囲 10 m 以上のイチョウは全国でおよそ 80 本しかない)。一本は石井町高原字中島の新宮本宮両神社の境内にあり、源平の合戦において屋島檀の浦で扇的を射抜いた那須与一にちなんだ伝説を持ち、「矢神のイチョウ」と呼ばれている。もう一本は石井町高川原字天神の天満神社にあり「天神のイチョウ」と呼ばれている。この樹には菅原道真にまつわる伝説がある。真偽はともかく徳島ではこのような古い伝説を持つ樹は珍しい。この二本の樹のある新宮本宮両神社と天満神社は、直線距離にしておよそ 900 m しか離れておらず、ライバルのように偉容を競いあっている。

しかし、これらのイチョウの歴史を調べてみると、資料を集め整理した文献はなく、また誤った内容が記された資料が多かったり、大変貴重で面白い資料であっても、これまで引用されることなく埋もれてしまっていたものもあることが分かった。そこで本論文は、資料を網羅的に紹介し、樹の辿った歴史や伝説等について整理し、多少分析を加えてみた。矢神のイチョウと天神のイチョウは石井町ならびに徳島県の財産であり、樹の保護のみならず樹の文化の継承の一助となることを願う。

2. 矢神のイチョウと天神のイチョウに関する資料

以下に矢神のイチョウと天神のイチョウに関する資料を古い順に挙げる。一つの資料の中に二本とも記述がみられるものもあれば、片方のみの場合もある。それぞれの樹の歴史や伝説に関する重要なポイントは後半の章にあらためて取りあげることにする。

文化十二年 (1815) 『阿波志 卷之四』¹⁾

藩撰の地誌『阿波志』がこれまでの調査で見つかった最も古い記録であり、卷之四の名西郡の章に二本のイチョウについて書かれている。

<矢神のイチョウ>

新宮本宮両神社に関しては「熊野祠」として次のように紹介されている。

熊野祠 中島村に在り二、一は本宮と称す其神伊弉册尊、一は新宮と称す其神速玉男命、事解男命俗に傳ふ文治中源宗隆本郡諸村を領す、因て此祠を置其共に祀る者十六村、第十、佐藤塚、下六條、上六條、高磯、高瀬、瀬部、南島、西覺圓、東覺圓、高島、高原、國實、重松、大萬、中島

意味するところは、文治年間に那須与一が当地に領地を得て祠を建て、また近隣の 16 村（挙げられている第十から中島までの村のこと）がこれを祀っている、ということである。「熊野祠」となっているのは、ここには述べられていないが、那須与一が熊野神社を勧請したためである。

また、『阿波志』の名西郡の塚墓の項には、「古墓 中島村にあり側に樸ソク（小木）あり俗に平宗隆の墓と呼ぶ」、氏族の項には「平宗隆 那須與一と称す文治二年高志郷十六村を賜ふ子孫来りて中島に居る管領に仕ふ」とある（いずれも笠井藍水の訳本より）。前者は中島村（当時）に那須与一のものとする墓があること、後者は那須与一が文治二年に 16 村を領地として得たこと、そして子孫が中島村に移り住んだとされることが記されている。

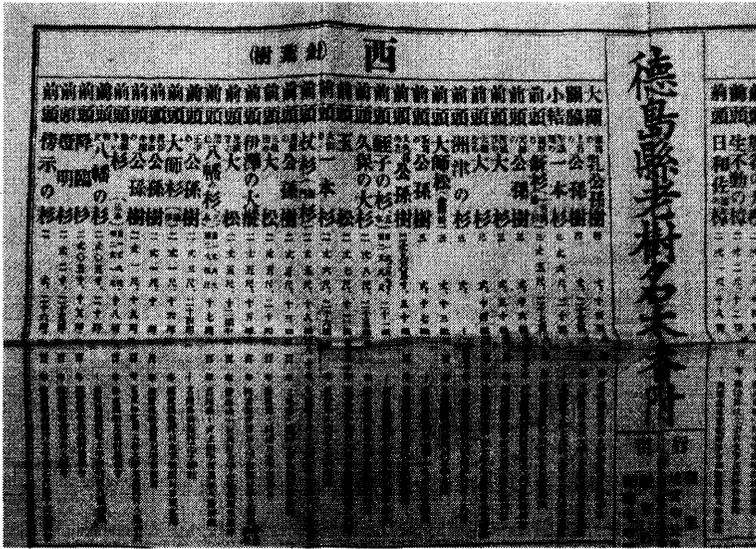
<天神のイチョウ>

同じく『阿波志 卷之四』の名西郡の章に天満神社について記されており、「菅廟 在天神村俗傳昔貞丸安房者負神像而至作祠以安之」とある。意味は、かつて貞丸安房という者が神像を背負って当地に来て、祠を作って神像を安置したと伝えられている、ということである。この言い伝えがいつごろ生じたものか分からないが、この『阿波志』が記録に残っている最も古い資料である。簡潔な内容であり、貞丸安房がいつ頃のどのような人物であるかや神像とはいかなる物なのかは記されていない。後年の伝説は内容がより詳しく、また様々なバリエーションが生じている。

大正三年（1914） 『徳島県老樹名木誌』²⁾ 『徳島県老樹名木番附』³⁾

『徳島県老樹名木誌』と『徳島県老樹名木番附』は徳島県山林会がともに大正三年（1914）に発行したもので、前者は樹の所在地、大きさ、樹齢、伝説を記した調査報告書であり、写真が添えられている樹もある。後者は、それらを樹の大きさや樹齢から格付けし、相撲の番附に摸した大変面白い資料である（図 1 a）。

a



b

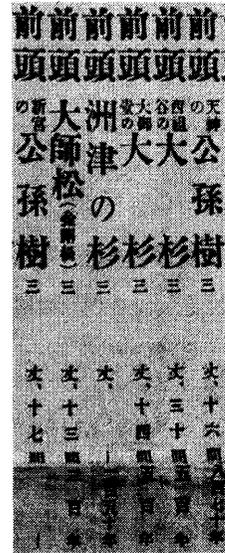


図1. 「徳島県老樹名木番附」³⁾における矢神のイチョウと天神のイチョウ

大正三年（1914）発行の『徳島県老樹名木番附』に西（針葉樹）にイチョウが含まれている。上位から大関、関脇、小結と1樹ずつ並び、以降前頭が続く（a）。天神のイチョウは前頭1枚目に「天神の公孫樹」として、矢神のイチョウは前頭6枚目に「新宮の公孫樹」として格付けされている（b）。ちなみに西の第1位である大関には国の天然記念物に指定されている上板町瀬部のイチョウが、第二位の関脇にも三好市山城町上名のイチョウが挙げられている。

<矢神のイチョウ>

『徳島県老樹名木誌』において新宮本宮両神社のイチョウは次のように記されている。

四、新宮の公孫樹

所在地 名西郡高原村大字中島村新宮神社

地上地上五尺の周囲 三十尺

樹齢 五百年

樹高 十六間

伝説 未詳

この樹は「徳島県老樹名木番附」では「新宮の公孫樹」として前頭7枚目に挙げられている。周囲三丈、高さ十七間とあり、『徳島県老樹名木誌』と同じ大きさであるのは当然であるが、樹齢の所は空欄になっている。「徳島県老樹名木番附」は『徳島県老樹名木誌』を参考にして作られたものと考え

えられるので、そのまま写せば 500 年と書かれるべきであるが、空欄となっている理由については不明である。

<天神のイチョウ>

『徳島県老樹名木誌』において天満神社のイチョウは次のように記されている。

三、天神の公孫樹

所在地 名西郡高川原村大字天神村天満神社境内

地上五尺の周囲 三十尺

樹高 十六間

樹齢 八百年

伝説 長暦元年丁丑秋菅原道真の家臣貞丸の子貞房菅公御自製の御肖像を負ひ回国せる内夢に此處に社殿を建つ可きの神告あり即社殿を建立して其像を祀れり银杏は即其際植付たるものならんと云ふ

幹の目通り周囲は三十尺 (9.1 m) で矢神のイチョウと同じである。興味深いことに 88 年経った現在においても樹は太くなっているものの両者の大きさはほぼ等しい。

伝説は『阿波志』と比べて詳しくなっている。原文では分かりにくいだが、他の資料を参考にして内容を書き直してみると「菅原道真の家臣貞丸には貞房という子がいて、彼は道真自ら彫った肖像を背負って諸国を巡り歩いていた。長暦元年 (1037 年) の秋に当地に辿り着いた時に夢のお告げがあり、祠を建てて肖像を中に安置して祀った。イチョウはその時に植えたものであろう。」となる。『阿波志』には時期が記されていないが、ここでは長暦元年 (1037 年) となっている。また、『阿波志』では貞丸安房という 1 人の人物のように書かれているが、ここでは道真の家臣貞丸とその子貞房となっている。さらに『阿波志』ではイチョウについては触れていないが、ここでは祠を建てた時にイチョウを植えたことになっている。しかし、それが長暦元年 (1037 年) のことだとすれば、樹齢は『徳島県老樹名木誌』が作られた時には 877 年となるはずであり、800 年としているのは計算が合わない。一方、「徳島県老樹名木番附」ではこの樹は「天神の公孫樹」として西の前頭 2 枚目に挙げられていて、周囲三丈、高さ十六間、樹齢八百七十年となっていて、計算が合うように樹齢が修正されている。

ともあれ長暦年間にイチョウが植えられたこと自体まず在り得ないことである。イチョウは中国からの帰化植物であり、正確な伝来時期は不明であるが、日本の文献史料に最初に登場するのは南北朝時代の公家の日記『愚管記』⁴⁾の永徳元年 (1381) の記録である。中国においてもイチョウが歴史に登場するのは 1057 年の役人の手紙に書かれているものが最も古い記録であり、そこには揚子江の南から入ってきた珍しい植物として記されている。「天神のイチョウ」が長暦元年 (1037) に植えられたとする伝説は、それよりも前ということになり、とうてい考えられない (イチョウの記録に関しては堀らによる「写真と史料が語る総覧・日本の巨樹イチョウ」⁵⁾に詳しい)。

『徳島県老樹名木誌』と「徳島県老樹名木番附」における2本の樹の扱いを比べてみると、「番附」では天神のイチョウが前頭二枚目、矢神のイチョウが前頭七枚目となっている(図1b)。真偽はともあれ、伝説の有無やそれに伴って算定された樹齢を考慮して天神のイチョウを格上に据えたのであろう。また、本書には一部の樹については写真も掲載されておりそれらは大変貴重な資料である。二本のうち、やはり天神のイチョウの写真だけが掲載されている(図4a)。

大正五年(1916) 『名西郡志』⁶⁾

本書は名西郡の郷土史を記した本である。大正五年(1916)に発行しているが、昭和四八年(1973)に再発行されている(その際書名を『名西郡誌』としている)。矢神のイチョウと天神のイチョウに関する記述はないが、神社仏閣の項目に新宮本宮両神社と天満神社に関する記述がみられる。

まず新宮本宮両神社については以下のように紹介されている。

新宮本宮神社 (俚俗新宮様と称す) 本村大字中島諏訪の元にある郷社にして新宮は諸冊の二神を祭り本宮は速玉男の神を祭る境内九百四十六坪社殿宏荘數百千歳の巨樹鬱蒼として森蔽を装へり神殿拝殿隨身門あり氏子約三千十戸あり文治年中下野の住人那須與市宗高此處に移封せらるゝや熊野の神を勧請せしものなりと云ふ當時の建築は頗る宏荘を極めしも長曾我部の亂に兵燹に罹り焼亡せしと又この南二町余を距て與市宗高を祀れる廟あり元本社境内の西北隅に在りしを移動せしものと傳ふ。祭典は輒今まで陰曆九月九日を例祭とし神輿の渡御に山車野臺の美観は殷賑熱鬧の巷を作り参拝者の四方より齎集する國中第一と称せらる

ここで注目すべきは、境内に「數百千歳の巨樹鬱蒼として森蔽を装へり」とあるが、イチョウが取り上げられていないことである。与一が放った矢がイチョウに当たったという言い伝えもここには記されていない。

次に天満神社についてであるが、こちらは「天満神社 大字天神にあり祭神は菅原道真公にして郷社なり。傳説あるも信じ難し」とあるだけで、いたって簡潔である。ただし、注目すべきは、伝説があるが信じがたいと書かれていることである。伝説というのは道真にゆかりの者が神像を背負って当地に来て祠を建てたという創建に関わる物語のことであろう。確かにこの伝説の根拠となるような資料は、まったく見つかっていない。

昭和三年(1928) 『四国老樹名木誌』⁷⁾

本書は四国営林局が編集・発行したもので、上下巻に分かれていて、上巻が徳島県と高知県、下巻が香川県と愛媛県の樹についてまとめられている。二本のイチョウは以下のように連続して紹介されている。

(184) 天神のイテフ

所在地 徳島県名西郡高川原村大字天神 天満宮境内

地上1M3周囲 9M1

樹高 29M

推定樹齢 900年

長暦元年秋、菅原道真の臣、貞房、菅公御自製の肖像を負背ひ（原文ママ）廻國せるうち夢に社殿を此地に建つべきの神告を受け即ち社殿を建立して今に至れり。銀杏はその際植えたるものならんと云う。

(185) 新宮のイテフ

所在地 徳島県名西郡高原村大字中島 新宮神社境内

地上1M3周囲 9M1

樹高 30M9

推定樹齢 500年

本書の記述は『徳島県老樹名木誌』や「徳島県老樹名木番附」を下地にしていると思われる。樹のサイズは尺貫法の数値をそのままメートルに換算した値であるし、天神のイチョウの挿話もほぼ同一である。ただし、『徳島県老樹名木誌』には登場していた貞丸の名前がないこと、貞房が貞丸の子であることが省かれているがこれは、これは転記する際の誤写ではないかと思われる。

天神のイチョウの樹齢は「徳島県老樹名木番附」から少し上がって 900 年となっている。長暦元年(1037)を植えた年とすれば樹齢は 891 年であるが、切りのよい数字にしたのであろう。

本書の編集は高知営林局であり、緒言には営林署や各村当局や篤志家から資料を提供してもらったことが述べられている。徳島県山林会（徳島県庁）発行の『徳島県老樹名木誌』や「徳島県老樹名木番附」も当然のことながら資料として、それを若干アレンジして作成したものと考えられる。

昭和二八年（1953）『徳島県報 第二八〇九号』⁹⁾

矢神のイチョウは昭和 28 年 7 月 21 日付けで県の天然記念物に指定された。徳島県の行政報告書である『徳島県報』には、指定に関して次のように記されている。

名称 矢神の銀杏

所在地 高原村字中島

所有者又は管理者 高原村教育委員会

昭和三十一年（1956） 『高原村史』⁹⁾

昭和三十一年（1955）に石井町、藍畑村、浦庄村、高原村、高川原村が合併し、石井町が発足した。『高原村史』⁹⁾は、合併により高原村がなくなることから村史を残す目的で作成されたようである。同様にその3年後には下に記すように『高川原村史』¹⁰⁾も刊行されている。新宮本宮両神社の矢神のイチョウは高原村に、天満神社の天神のイチョウは高川原村にあり、本書『高原村史』では矢神のイチョウのみが紹介されている。第七章に高原村の神社仏閣がまとめられており、新宮本宮両神社についても詳しく紹介している。以下にその一部を抜粋する。

由緒

創立年代は不詳であるが、残って居る書類によると。（原文ママ）寿永年間源平屋島の戦に那須与一宗高は、義経に従って讃岐屋島檀の浦で扇の的を射落し、其の功により阿波国名西郡の内にて三千貫の采地を拝領し、中島の地に来て古来より鎮座している神社の社地に、かねて信仰せる紀州熊野に座す新宮社の別魂を勧請して新宮神社とし、古来より座す神社を本宮とし併せて新宮、本宮両神社と称している。

（中略）

境内銀杏は県文化財として指定されている。那須与一ゆかりの名木である。

本社南二町の所に那須与一の墓所がある。始め与一庵を置き祀っていたが、後に与一神社として祀られるようになった。凝灰岩五輪の塔で、与一の墓と古来伝えられ、昔よりどの文献にも書かれている。（後略）

神社についてはかなり詳しく紹介されているが、イチョウについては県の文化財（天然記念物）に指定されていること、那須与一ゆかりの名木とだけ記されている。那須与一ゆかりとはどういうことを指すのか具体的に記されていない。

しかし本書には、後でイチョウについてだけ紹介した記述があり、天然記念物の指定理由が以下のようになっている。

天然記念物新宮本宮両神社の銀杏

県指定理由

那須与一宗高屋島の合戦に扇の的を射抜き、その功により五つの荘園と阿波中島郷三千貫の采地を拝領し、宗高此の地に移り一社（新宮社）を建立して神恩を謝したりという。この神前の銀杏は種々の伝説とともに生長し、附近の人々に愛称されるに至り、神護の名木として今日に至ったものである。

銀杏はもと南支那より渡来したもので今日神社仏閣に樹（原文ママ）えられ老樹大木となっているものが多い。その老生するに及んで「せんだん」を着生し、奇態をなしているものは極めて少い。現状は胸高の周囲九、四米、高さ三十米以上、樹冠面積東西十六、五米、南北二十米であるが、尚樹勢の旺である等より勘案して、指定天然記念物たる価値あ

りと認めたものである。

ここでも「銀杏は種々の伝説と共に生長し」とあるがその具体的内容は記されていない。「那須の与一ゆかりの」「種々の伝説」という表現には、具体的に記すことをためらう理由があるように感じるのうがち過ぎであろうか。後年の史料では与一が山上から射た矢がこの樹に当たったとする伝説があることが記されるようになるのだが、ここではまだ書かれていない。本書が書かれた当時でも同様の言い伝えがあったのだが、文字通り口で言われるだけで、典拠とすべき資料がないのかもしれない。

昭和三四年（1959） 『高川原村史』¹⁰⁾

上に挙げた『高原村史』の発行から3年後に高川原村の郷土史を記した『高川原村史』が発行された。本書には天満神社について詳しく記述があり、その中にイチョウについては「一带に老樹がうっそうと茂り、特に拝殿前の銀杏の大木は実に巨木で、この社の古いことを物語っている。」とある。また、由緒には次のように記されている。

延喜三年亥年、道真公は藤原氏との勢力争いのため、無実の罪を受けて遂に九州へ流されることとなり、厳重な警護の下に駕籠で出発せられ、岡山で一日滞在した中の隙を窺い、忠臣房丸が公の御目に懸った時、汝の忠義には感服するが汝は老人で九州までは行けないからこれを我れと思えとて自筆の像を渡された。房丸はそれから讃岐を経て阿波に移り、道真公の父清公の領地すなわち今の天神へ来て、清公・道真両公を祀って礼拝し続けたが、房丸は死去した。その後、房丸の子真丸は国府庁の役人であった時、京都の北野の天満神社の御分霊を受けて来た。北野には今も御分霊を渡した文書がある筈である。天満神社の境内に松の大樹があったが、蜂須賀公が御蔵を建築するために伐採せられ、維新になって民間に払い下げられた。その松の木の長さは六間で、三尺角全部が赤身であったことは、多数の人が知っている所である。銀杏の大樹は回り十二メートル半、樹齢八百五十年と県林務課の技師は証明したという。その他老樹が多く在って、社地は境内七反有余である。名西郡の大社として、殊に児童・生徒・学生の参拝が多く、大願成就の神として崇拜せられ、特に夜間の参拝者が多いのである。

創建に関わる物語は、前に挙げた資料とまた異なっている。道真の家臣とその息子であり神社を創建した人物の名前が「房丸」「真丸」に変わっている。また、イチョウが創建の時に植えられたという話は除かれている。このような創建に関わる物語の変化については、第4章であらためて述べることにする。なお、「樹齢八百五十年と県林務課の技師は証明した」というのは、先に紹介した大正三年（1914）の『徳島県老樹名木誌』のことを指していると考えられる。

なお、道真が左遷の年を延喜三年（903）としているが、正しくは延喜元年（昌泰四年）（901）で

ある。

昭和三五年（1960） 『阿波名木物語』¹¹⁾

著者は徳島新聞社の記者であり、本書は徳島新聞出版部から発行されている。趣味で県下の名木を訪ね歩いて伝説を調べていたものが高じて出版を思い立ったとある。新聞記者らしく、関係者に樹について語ってもらっているのをインタビュー形式で載せたりしている。また、付録として大正三年（1914）の徳島県山林会のデータを載せ、それらの樹がどうなったか（枯死、伐採、被災により消失したものも多い）が記されている点でも貴重な資料である。

<矢神のイチョウ>

那須与一が矢を立てる

県の天然記念物に指定せられている名西郡石井町（旧高原村）中島、新宮本宮神社のイチョウは、目通り回り（九・一メートル弱、高さ三メートル、樹齢約五百五十年、幹にセンダン（棟）を着生しているのは奇観であり、枝葉のひろがり東西一六・四メートル、南北二〇メートル、樹勢はやや衰えて、普通のイチョウよりは葉が小さくなっている。

寿永の昔、源平屋島の合戦に、那須与一宗高は、源義経から、平家方の船に立てた扇の的を射ることを命ぜられ、日ごろ信ずる熊野明神を一心に祈って見事に要（かなめ）を射切り、武門の面目を施した。

世は源氏の手へ帰し、与一は戦功によって五か所の荘園と阿波国名西里分で三千貫のさい地をもらった。そこで与一は神恩報謝のため、熊野権現の分霊を勧請し、新宮神社として祭った。古来鎮座する神社を本宮社といい、新宮本宮神社と称している。里人はいまに厚く景仰し、旧村内第一の大社（旧郷社）として、旧九月九日（現在は陽暦十月十九日）を例祭日としており、ミコシ二台のほか山車屋台（最盛時には二十一台あったという）も出、馬も数多く集ってなかなかぎやかであった。

与一は戦果てて阿波入りするとき、阿讃山脈の分岐点大山寺から矢を飛ばしたところ、現在境内のイチョウの木に当たったので、いまに“矢立のイチョウ”と呼んでいるが、その樹齢の五百五十年から計算すると、はえた年が二百二十年も後になるので年代が合わないことになる。

那須与一とイチョウとの直接の関わりを記した最初の文献であり、イチョウは与一の時代からあったことになる。また、「矢神のイチョウ」以外に「矢立てのイチョウ」という別名が付いていることを記した最初の文献でもある。

<天神のイチョウ>

高川原天神のイチョウ

名西郡石井町（旧高川原村）天神社の境内にあるイチョウは、大正三年の調べで、目通り三十尺（九メートル余）回り、高さ十六間（二九メートル余）樹齢八百年といわれた。

長暦元年の秋、菅原道真は、筑紫の太宰府に流されたが、家臣貞丸の子貞房は、主君自作の肖像を背負い回国中、ここで一夜の宿を求めた。その夜道真が現れて

「お前がわしの像とともに諸国を回ってくれる志はまことにありがたい。どうかここへ社殿を作ってまつてくれ」といったかと思うと目が覚めた。貞房はこれを靈告とし、早速社殿を造営してその像を祭った。イチョウはその時に植えたものだろうといわれる。

その後、村に美しい娘が生れた。いつかこのあたりには見かけぬ美男に言いよられ、恋知るころの青春にうづく娘心の、夜毎にしるんで来る男を待つ身となり、はだを許すとさらに男恋しく、うっとりとなって身をまかす恋のとりことになっていた。

やがて月満ちて産みおとしたのはたらいに七杯もあるへびの子であった。男はこのイチョウの精だったという伝説がある。

長暦元年（1037）に菅原道真が太宰府に流されたとあるが、これは間違いであり、道真の太宰府への遷任は昌泰四年（901）である。長暦元年（1037）は、他の資料では社殿を立てた時期としている。

イチョウの精が男に化けて娘を惑わす話は他に見られない。地元の古老の話では、この樹でそのような伝説は聞いたことはなく、二ツ森の大クスにそっくりの話聞いたことがあるので、本書は樹を取り違えているのではないかとのことであった。確かに『高川原村史』では次のように記されている。

「二ツ森神社の境内にある昭和二年に建てられた記念碑には、かつて境内の大楠には、洞に大蛇が住んでいて夜な夜な村人に悪さをしていたが、薪を燃やして楠を炙ったら大蛇が消えたという伝説が記されている。」従って、この話しは『阿波名木物語』の著者が樹を間違えて記したものと考えられる。

昭和三九年（1964） 「徳島県報 第三九一四号」¹²⁾

天神のイチョウは昭和 39 年 5 月 1 日付けで県の天然記念物に指定された。徳島県の行政報告書である県報には、指定に関して次のように記されている。

名称 天神のイチョウ

所在地 徳島県名西郡石井町高川原神木二五一番地（天満神社境内）

管理者 石井町教育委員会

奇妙なことに住所が実際の場所と異なっている。正しい住所は「高川原天神 334」である。どうしてこのような間違いがおきたのか調べてみると、ここに記されている「高川原神木 251」という住所にも別の天満神社が存在することが分かった。「神木」という地名から、こちらを間違えて記載してしまったと思われる。

昭和四四年（1969） 『徳島の文化財 1969』¹³⁾

天然記念物のリストに「矢神のイチョウ」と「天神のイチョウ」が載っている。住所は名西郡石井町高川原神木二五一（天満神社境内）となっており、県報と同じく別の天満神社の住所が記載されている。また、指定日が昭和三八・六・一八となっているが、これも間違いである。正しくは上に記したように昭和三九年（1964）の5月1日である。以降、指定日を誤っている文献がいくつも出てくるが、本書が初出でそれをそのまま引用していった結果かもしれない。ではなぜ指定日を昭和三九年（1964）5月1日ではなく、昭和三八年（1963）6月18日と書く間違いが生じたか考えてみると、本書の天然記念物の一覧表は指定日順に並んでいて、矢神のイチョウと並んで記されている「船窪のつつじの自然群生地」と「ボウランの北限自生地」の指定日が「昭和三八・六・一八」となっている（これが正しいことは『県報』で確認済み）。矢神のイチョウはその翌年の指定であり「昭和三九・五・一」と記さなければならないところを「〃」と記されていて、その前の指定日と同じとなっている。リスト作成時のうっかりミスと考えると間違いはないだろう。以降、この資料を参照した文献では、誤った指定日が踏襲されることになったものと考えられる。

昭和四七年（1972） 『文化財読本』¹⁴⁾

徳島県教育委員会編集発行の本書にも天然記念物のリストが掲載されているが、前述の『徳島の文化財 1969』と同じく住所と指定日が間違っている。

昭和五二年（1977） 『名西の伝説』¹⁵⁾

本書は郷土史家である著者が、資料や住民へのインタビューに基づいて名西郡に残る伝説を集めたものである。

<矢神のイチョウ>

矢神のイチョウについては次のように記されている。

矢立のイチョウ

石井町高原の中島にある新宮本宮神社のイチョウは、「矢立のイチョウ」といって、次のような伝説がある。那須与市が屋島合戦凱旋の後、阿讃の境界の山上より、南方の平原に向かって矢を放つと、この地までとんできてイチョウの木に矢があたった。ここに熊野神社の分霊を勧請し、新宮本宮としてまつり、領内の守り神とした。

そのイチョウは、いまも「矢立のイチョウ」と呼ばれ、樹齢約五百五十年、高さ三一メ

ートルのみごとな木で、県文化財に指定されている。

内容は『阿波名木物語』とほぼ同じである。矢を放った位置は徳島と香川の境界の山となっている。一方、『阿波名木誌』では「阿讃山脈の分岐点大山寺」となっているが、同じとみてよいだろう。樹齢を550年としているが、那須与一の時代とかけ離れていることについては触れていない。

<天神のイチョウ>

天神のイチョウについても項目をたてて紹介されているが、内容は『阿波名木物語』をそのまま写したもので、ここでは省略する。一方、天満神社についても独立した項目を設けてあり、次のように記されている。

天神社

延喜元年（九〇一）正月、道真が筑紫へ流されるとき、家臣貞丸がわかれを悲しみ、一緒に連れていってくれ、そうでないと死ぬという。道真はこれをあわれみ、仏像一体を彫刻し、さとして帰した。貞丸は家に帰り朝夕この仏像を拝んでいたが、後、天延二年（九七四）春八十九歳で亡くなった。

その子貞房は、父の遺命を受けて諸国をまわり、霊夢によって長暦元年（九三七）この地につき、その仏像をまつたといわれている。（名西郡誌）

『名西郡誌』（原本の書名は『名西郡志』）を参考資料に挙げている。ところが『名西郡志』にはこの話は載っていないし、むしろ「傳説あるも信じ難し」と記されているので、著者の勘違いであろう。貞丸の子の名前が貞房となっている点は『徳島県老樹名木誌』、『四国老樹名木誌』、『阿波名木物語』と同じである。『阿波名木物語』を参考としたものであろうか。

昭和五六年（1981） 『徳島県神社誌』¹⁶⁾

徳島県神社庁が編集・発行した『徳島県神社誌』には県下の神社の種々の情報が掲載されている。新宮本宮両神社に関しては由緒に「新宮さま」と俗称される。元二十八ヶ村の氏神。『社記』によれば「成務天皇の朝の創祀なり」という。新宮は諾冉二神を祀り本宮は速玉男の神を祭る。社殿宏壮。一説に寿永年間下野の住人那須与市宗隆屋島合戦の功により文治年中此処に移封せらるるや熊野の神を勧請し新宮神社と称し、古くよりの神社を本宮社となし併せて新宮本宮両神社と称す。又この南二町余を距て与一宗隆を祀れる廟あり。もと本社境内西北隅にありしを移したものと云う。（後略）」と記されている。イチョウについてはまったく触れられていない。また天満神社に関しては、由緒に「創立年代不詳。俗説によれば昔、貞丸安房なるものが御神像を捧持し当地に來り、祠を営みてこれを斎い奉ったと言う。明治五年郷社に列す。境内社殿前に県指定文化財の大公孫木がある。」とある。イチョウのことを、公孫樹とも称することもあるが、「公孫木」は公孫樹の誤記と思われる。創建に関

わる人物の名前は貞丸安房としており『阿波志』と同じである。

昭和六一年（1986）『総合学術調査報告 石井町』¹⁷⁾

徳島の様々な分野の研究者から構成される阿波学会は、毎年市町村を定めて総合的な学術調査を行っており、本書は昭和六一年（1986）に行なわれた石井町の調査の報告書である。

「8. 社寺等に残る巨樹・老木」の項に「イチョウの巨樹」として矢神のイチョウと天神のイチョウ、そしてイチョウ庵のイチョウが以下のように紹介されている。

イチョウの巨樹

矢神のイチョウ

周 9.76m 中島新宮神社境内。昭和 28 年 7 月 21 日県天然記念物指定。昭和 56 年 3 月 24 日日本殿の火災により類焼して半分が焼け、いたいたしい姿になりながらも、力強く生き残っている。

天神のイチョウ

周 10.50m 高川原天神境内。昭和 38 年 6 月 18 日県天然記念物指定。樹齢は推定 900 年に及び、県下第 4 位の大イチョウ。長さ 3m に及ぶ多数の気根が垂れ、堂々とした偉容をもつ巨樹。

イチョウ庵のイチョウ

下浦の銀杏庵には周 6.37m (♀) と 5.15m (♂) のイチョウの大樹が、並立する。

昭和五六年（1981）に起きた新宮本宮両神社の火災により、矢神のイチョウが延焼したことが記されている。

天神のイチョウを県下第 4 位と表しているが、『徳島県老樹名木番附』では確かにイチョウとして 4 番目に格付けされており、これを基にしているのかもしれない。

また、211～222 頁には天満神社の解説があり、由緒として「創立年代は不明であるが、伝承によると昔貞丸安房という人が、道真公の神像を持って当地に来て、祀ったのが初めという。境内には大樹がうっそうと茂っているが、社殿前の大イチョウは周囲 10.5m、県指定天然記念物で、多くの乳を垂れ、乳銀杏として崇敬されている。」とある。気根状の乳柱が発達したイチョウを乳イチョウと称して、安産や出産後の婦人の母乳の出を良くしようと信仰の対象となっているイチョウは数えきれないほど存在する。筆者は全国を回って数多くの巨樹イチョウを見ているが、天神のイチョウほど大きな乳が数多く下垂しているのは全国でも珍しい部類に入ると思う。現在、先端が切られた乳が多いが、このような信仰で切られたり、あるいは盆栽にするために切られることもあるという（切った乳を土に植えると根を出して生長するが、それが珍重される）。しかし、天神のイチョウが乳銀杏と称され

ていることを記しているのは本書が最初かもしれない。

平成三年（1991） 『石井町史 上巻』¹⁸⁾

『石井町史』における2本の巨樹イチョウの記述を引用する。

<矢神のイチョウ>

1 矢神のイチョウ 中島新宮本宮両神社境内には、周囲約一〇メートル、高さ二五メートルのイチョウがある。昭和初期（一九二六年ごろ）に落雷に遭った後も生育をし、昭和二十八（一九五三）年七月二十一日、県天然記念物の指定をうけた。

昭和五十六（一九八一）年三月二十四日、神社本殿の火災により類焼して、幹の中央部が焼けて、いたいたしい姿になりながらも、力強く生き残っている。

樹齢は九〇〇年以上に及び、源平合戦の扇の的を射たという伝説にまつわる「那須与一の矢神のイチョウ」として、言い伝えられる。

昭和初期に落雷で被災したことについて触れているのは本書が初めてである。那須与一とイチョウの直接の関わりについては記していないものの、樹齢は那須与一の時代に合わせた数字になっている。

<天神のイチョウ>

2 天神のイチョウ 天神の天満神社の境内に、周囲約一一メートル、高さ三〇メートルにおよぶ大イチョウがある。樹齢推定九〇〇年になるといわれ、県下第四位の大木である。長さ三メートルもある多数の気根が垂れ堂々とした偉容で、昭和三十九（一九六四）年五月一日、県天然記念物の指定を受けた。

県下第四位の大木」という表現は明らかに誤っている。おそらく前述の『総合学術調査報告 石井町』の中に見られる「県下第4位の大イチョウ」という記述を、イチョウの4番目ではなくあらゆる樹種を含めて4番目と解釈したためだと思われる。

平成三年（1991） 『那須与一の歴史・民俗的調査研究』¹⁹⁾

栃木県立博物館による同書は、各地に残る与一に関する情報をまとめたもので、新宮本宮両神社については以下のように記されている。

新宮本宮神社は、与一が熊野から勧請したというもので、さらに神宮寺を創建したという。ここは源平屋島の戦いの際、与一が扇の的を射落としたときの矢が飛んできて落ちたところであるという。ここを矢神といい、落ちたところの銀杏を「矢神の銀杏」という。この

木には催乳の神の信仰がある。

ここでは、「矢神の銀杏」の由来が、屋島の戦いの際に射た矢にちなんでいるとしており、戦の後に、山上から射た矢が当たったとしている前述の伝説とは異なる話になっている。また、乳信仰があるとしているが、本書の他にこの樹に関する乳信仰は見あたらない。この樹はこの大きさの古樹にしては乳柱の数が少なくかつ小さいため、乳信仰の存在は疑問である。

平成四年（1992） 「徳島の文化財」²⁰⁾

昭和四四年（1969）に同じタイトルの本が出版されているが、本書は徳島県教育委員会が平成四年（1992）に作成したものである。前者はリストであるが、本書では各説明が付してある。二本の巨樹イチョウについては、それぞれ次のように記されている。

<矢神のイチョウ>

このイチョウの幹囲は約九・五メートル、樹冠は、およそ、東西一六・五メートル、南北二〇・六メートルに及んでいる。

古来、那須与一宗高にからむ伝説があり、これが「矢神のイチョウ」の名の由来になっている。

イチョウは、老樹になると潜伏芽が気根となって乳が垂れる。こうした老樹を、催乳の神としてあがめる風習が、古くから伝わっている。

とあり、上記の文献同様乳信仰について触れているが、本書ではこの樹に乳信仰があると明言しているわけではなく、むしろ一般的な話として乳信仰を取りあげているとみるべきかもしれない。

<天神のイチョウ>

このイチョウは、幹囲約一〇・五メートル、高さ約三〇数メートルほどである。

樹齢は、およそ九〇〇年と推定されている。

主幹や分枝の基部には、多数の乳を垂れている。径二〇～三〇センチのものが一〇数垂、径一〇～二〇センチのものが三〇数垂、一〇センチ未満のものは、数一〇垂に及ぶ。中には、成長して地上に達し、根を下ろして主幹と相抱合するものも少なくない。

ここで特徴的なのは、乳の大きさと数を詳しく記していることである。個人的な感想であるが、確かにこの樹の乳の見事さは全国でもトップクラスであると思う。

また、天然記念物指定日は昭和39年5月1日、住所は高川原神木251となっており、「徳島県報 第三九一四号」通りに記載されているが、上述のように指定日は正しいが、住所は間違っている。

平成十六年（2004） 『阿波の巨樹巡り』²¹⁾

とくしま森と緑の会編集・発行の本書には、徳島の巨樹が 100 本掲載されており天神のイチョウは 17 番目に、矢神のイチョウは 19 番目に紹介されている。以下にその内容を抜粋する。

17 イチョウ「天神のイチョウ」

所在地：石井町高川原字神木

所有者又は管理者：天満神社

幹周：10.38 メートル

樹高：27 メートル

推定樹齢：1000 年

巨樹の話

本樹には色々な伝説がある。その一つとして、平安時代に遡るが、菅原道真が九州太宰府に流された後、その臣貞丸の子の貞房が、道真自作の肖像を背負って諸国を回っていた。ある日ここ高川原村の天神さんがある所で野宿をしたところ、その夢枕に道真公が現れて、「お前の志はまことにありがたい。できることならこの地に社殿を造ってほしい」と言って消えた。貞房はその後、この地に社殿を建てた。それがこの天満神社で、イチョウはその時に貞房が植えたと言われている。昭和 39 年（1964）に「天神のイチョウ」として徳島県天然記念物に指定されている。

所在地は「神木」となっているが、これは「徳島県報 第三九一四号」に誤って記載されて以来しばしば見られる間違いで、正しくは「天神」である。

伝説は「徳島県老樹名木誌」、「四国老樹名木誌」、「阿波名木物語」、「名西の伝説」とほぼ同一である。推定樹齢は、切り良く 1000 年としている。

19 イチョウ「矢神のイチョウ」

所在地：石井町高原字中島

所有者又は管理者：新宮本宮両神社

幹周：9.76 メートル

樹高：20 メートル

推定樹齢：800 年

巨樹の話

本樹には、屋島の源平合戦で扇的射抜いた那須与一にまつわる伝説がある。源平の戦いで勝った後、与一は阿讃山脈にある大山寺から矢を放ったところ、このイチョウに当たったと言う。このため、本樹には「矢立のイチョウ」あるいは「矢神のイチョウ」という名が付いたと言われている。

その後、与一は論功行賞として阿波の国名西の地を与えられたので、神恵に感謝して新宮を熊野より勧請したと伝えられている。

樹勢は旺盛であり、幹にセンダンが絡み合って奇観を呈している。

昭和28年(1953)に「矢神のイチョウ」として徳島県天然記念物に指定されている。

那須与一が射た矢が当たったとする伝説が紹介されている。しかし、推定樹齢は800年としており、与一が生きていた時代とは合わない。800年としている資料は他にないが、その根拠は不明である。

資料の紹介は以上である。次に、それぞれの樹にまつわる伝説について整理してみよう。

3. 那須与一と矢神のイチョウ

新宮本宮両神社のイチョウは「矢神のイチョウ」と呼ばれている。かつて新宮と本宮が別に存在していたが、現在は一つの社殿に祀っているので新宮本宮両神社と称されるようになったのだが、新宮は那須与一が熊野から勧請したと伝えられている。那須与一は弓の名人としてつとに有名であるが、正史に登場しないので、実在の人物ではなかったとする説もある。与一が実在したかどうか、また石井町周辺に領地を得たのかどうかは大きな問題であるが、それを論ずる知識は持たないので、ここでは触れない。与一と矢神のイチョウとの関係について絞って考えてみたい。

前述したように、イチョウは中国からの帰化植物であり、那須与一の活躍した時代に日本にイチョウに関する史料や遺物は発見されておらず、イチョウはその当時まだ日本に入ってきていないと考えられる。従って「矢立て」の伝説は、後世の創作ということになる。那須与一が創建したと伝えられる神社の境内に目を見張るような巨樹があれば、弓と樹を結びつけた伝説が生まれるのは当然のことだと思われる。では、いつ頃この伝説は作られたのであろうか。江戸時代の文化十二年(1815)の資料『阿波志』にはイチョウは登場せず、もちろん矢立て伝説も書かれていない。大正時代の資料にはイチョウは出てくることはあっても矢立て伝説はまだない。特に大正三年(1914)の『徳島県老樹名木誌』に「伝説 未詳」と記されているのは重要である。昭和二八年(1953)に天然記念物に指定される際に「矢神の銀杏」という名称が用いられているが、与一と直接の繋がりを示しているとは断言できない。「矢神(与一)の(勧請した新宮の境内にある)銀杏」と解釈することができるからである。昭和三一年(1956)の『高原村史』には天然記念物指定理由が記されているが、そこには「神前

の銀杏は種々の伝説とともに生長し」とあるものの、それが矢立て伝説を指しているかどうか定かでない。山上から放った矢がイチヨウに当たったという矢立て伝説がはっきりと現れるのは昭和三五年（1960）の『阿波名木物語』からである。以降、昭和五二年（1977）年の『名西の伝説』、平成十六年（2004）の『阿波の巨樹巡り』に同じ伝説が記されている。これをみる限り、矢立て伝説が生まれたのは、昭和以降と考えられる。また、平成三年（1991）の『那須与一の歴史・民俗的調査研究』には、与一が放った矢は山上からではなく、屋島の戦いの際のものであるとする伝説が紹介されている。

矢立て伝説によれば、矢神のイチヨウに当たった矢は、与一が香川県との県境の山にある大山寺から下の平地に向かって射た矢であるとしている。大山寺を訪ねて住職に話をうかがったところ、住職が子どもの頃に、元住職であった祖父からこの伝説のことを聞かされたそうである。住職は今年 60 歳になられるとのことであつたので、50 年ほど前には矢立て伝説が存在していたことになる。ところで、大山寺（徳島県上板町神宅）と新宮本宮両神社は直線距離にして 8.5 km 離れており、どんな名人でも矢が届くはずのない距離である。では、なぜ与一が大山寺から矢を射たとする伝説が生じたのであろうか。その理由として大山寺が古くからの名刹であり、石井町を見下ろすことのできる山上にあるということが考えられる。そして、その他にも興味深い事実がある。大山寺にも幹の目通り周囲が 600 cm の巨樹イチヨウが存在するのである。しかもそのイチヨウは武蔵坊弁慶が植えた寺では伝えられている（その伝説がいつ頃から伝えられているか、残念ながら古記録は残っていない）。二本の巨樹イチヨウがともに源平合戦の源氏方の英雄と結びつけられているのは大変面白い。

4. 天神のイチヨウの伝説について

これまで紹介してきたように天満神社にも創建やイチヨウの植樹に関わる伝説がある。どの資料においても菅原道真の像を背負った者が当地に辿り着いて祠を建てて像を安置したのを開基としている点で共通している。これを基本骨格として、細かい点でいくつかのバリエーションがあるものの、大きく三つのパターンに分類される。

第一は文化十二年（1815）の『阿波志』に記されているタイプである。貞丸安房という者が像を背負って当地に来たとしている。昭和五六年（1981）の『徳島県神社誌』、昭和六一年（1986）の『総合学術調査報告 石井町』もこのタイプである。

第二は、大正三年（1914）の『徳島県老樹名木誌』を初出とするもので、道真の家臣貞丸が道真自作の像を預かり、旅した後当地で祠を建てたのは息子の貞房であるとし、イチヨウもその時に植えたとするタイプである。『阿波志』では貞丸安房であった人物が貞丸と貞房の二名になり、名前も変化している。そして霊夢、イチヨウの植樹という出来事が付け加わっている。このタイプは昭和三年（1928）の『四国老樹名木誌』、昭和三五年（1960）の『阿波名木物語』、昭和五二年（1977）の『名西の伝説』、平成十六年（2004）の『阿波の巨樹巡り』が入る。

第三は、昭和三四年（1959）の『高川原村史』にみられるもので、道真の家臣の名前は房丸になっ

ている。また、諸国を旅して当地に辿り着いたのは子ではなく房丸自身としている。そして息子の名前も真丸という他の資料にはない名前であり、彼が北野天満宮の御分霊を受けたとしている。最もディテールが記されている資料であるが、他の資料には同様の伝説が見あたらない。

山中耕作編『天神伝説のすべてとその信仰』²²⁾には、菅原道真及び彼の家臣に関する伝説が収められている。その中には、この石井町天満神社の伝説は取りあげられていないが、道真の家臣が道真の死後に廟を建てるという共通の主題を持った伝説が各地に多数存在することが記されている。そのような伝説の中でも、三重県松阪市の菅原神社に伝わる家臣が木製の道真像を背負って旅する話や大阪市北区神山町の綱敷天満宮に伝わる道真が左遷される時にお供していた従者とその息子に、自筆の御影を渡してここに残るようにと命じた話、そして道真が左遷の際に家臣に預けた梅と松の二本の鉢の木に観音像を刻み、その後家臣は道真の長男を訪ねて高知に渡る話には、より強く石井町の伝説との共通性が見られる。ただし、家臣やその息子の名前が石井町の伝説と一致する伝説やイチョウが登場する伝説は同書には見られなかった。このような各地の伝説がどこまで史実であるのかは不明であるが、石井町の伝説もある程度これらの伝説を下地に形成されていったものだろう。

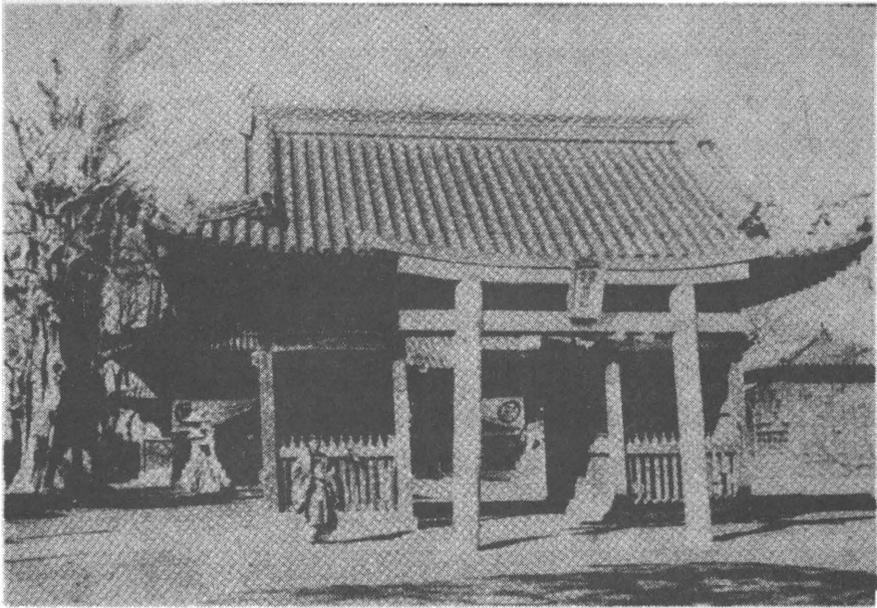
5. 古写真との比較

<矢神のイチョウ>

大正五年（1916）の『名西郡史』に新宮本宮両神社と矢神のイチョウの写真が掲載されている（図2a）。現在の様子（図2b、c）と比較すると、随神門や鳥居は当時のままに残っているが、玉垣や手水場そして手前の鳥居が造られたことが分かる。また、電柱やカーブミラーが時代の推移を感じさせる。樹を同じ角度から比較すると、90年前と小枝は増えているが、樹のシルエットはあまり変化していないことが分かる。樹肌の変化は、写真では分かりづらいが、実際に近づいて肉眼で観察してみると、90年前に見られるゴツゴツした樹肌の特徴は大きく変化し、現在はその面影が失われている。

昭和三一年（1956）の『高原村史』にもこの樹の写真が載っている（図3a）。現在の様子（図3b）と比べてみると、本殿拝殿は昭和五六年（1981）の火災で消失し、その後再建されているが、狛犬や灯籠、樹の回りの柵は50年前と変わっていないことが分かる。そして樹自体は、50年前の写真にみられている左右に広がった枝は現在は見られず、一方現在は細い枝が密生している。樹肌の様子にも変化が見られる。現在は火災の影響と思われる裂け目が垂直方向に深く刻まれているが、火災の前である50年前の写真においても、樹の表面のかなりの部分において樹皮が剥がれ、木部が露出しており、傷みが激しい状態であったことが分かる。枝の数も少なく、樹勢の衰えていたことがうかがわれる。その4年後の発行された『阿波名木物語』にも「樹勢はやや衰えて、普通のイチョウよりは葉が小さくなっている。」とそのことが指摘されている。その後、大きな火災に合い、幹も燃えたものの、樹勢は少しずつ回復し、現在の写真に示されるように枝も増え、葉の大きさも健康な樹と変わらぬようになっている。

a



b



c



図2. 新宮本宮両神社（『名西郡史』⁶⁾と現在の比較）

大正五年（1916）発行の『名西郡史』掲載の新宮本宮両神社の写真 a には、矢神のイチョウが写っている。b および c は、それと同一の角度で撮影した現在の様子である（平成十八年（2006）12月20日撮影）。

a



b

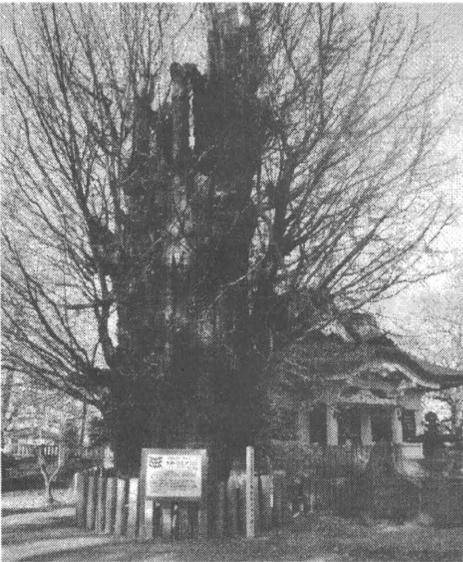


図3. 矢神のイチョウの変化（『高原村史』⁹⁾と現在の比較）

昭和三一年（1956）発行の『高原村史』の写真（a）と同一の角度で現在の様子（b）を撮影した（平成十八年（2006）12月20日撮影）。

<天神のイチョウ>

天神のイチョウの古写真として、大正三年（1914）の『徳島県老樹名木誌』と大正五年（1916）の『名西郡史』の2つを挙げる。なお、これらと同じ写真がそれぞれ昭和三年（1928）の『四国老樹名木誌』と昭和三四年（1968）の『高川原村史』にも使われている。

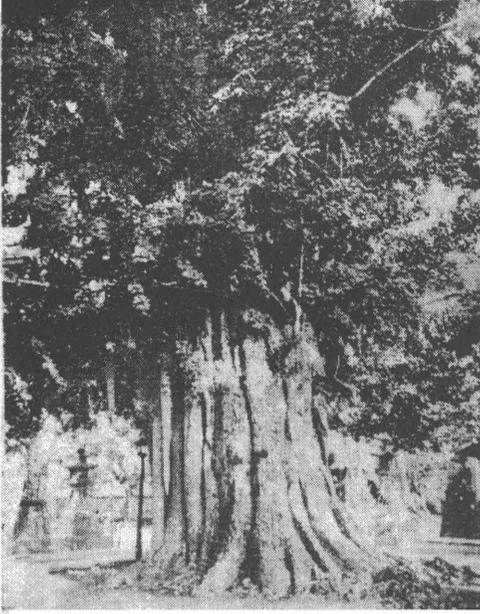
これらの古写真と現在の樹の姿を比較した（図4、5）。結論から言うとそれぞれ92年、90年経っているが、昔の樹の姿の特徴は現在でもかなりそのまま残っていることが分かった。『徳島県老樹名木誌』の写真の場合、現在は天然記念物指定の看板が設置されているため、樹の大きさや角度をまったく同一に撮影することは不可能であったが、それでも図4に示すように樹の特徴がよく残っていることは明白である。しかし、当然ではあるが変化も見取れる。その相違を示したのが図4c、dである。まずcに存在する楕円1の乳がdでは存在しない。楕円2で示した幹は昔に比べて現在はかなり太くなっているようだ。楕円3の乳は長くきれいな円錐形であったものが、その後切断され、そして切断面から細い乳が再び成長していることが見て取れる。人為的に切られたものと思われる。楕円4の乳は昔に比べてかなり太くなっているが、やはり途中で切断されたと考えられる不連続な形態である。楕円5はcとdで同一の乳と考えられるが、かなり伸びていて歳月を感じさせる。鉛直に下垂するのではなく、幹の窪みに沿うように伸びていったので、切りにくく、人為的に切断されるのを免れたものであろう。楕円6はcでは大きな黒い影が2つくっきりと見えており、dでも同じ位置にやはり影がある。これはdの左の影の部分は樹にあいた穴状の構造であることが分かる。右の方にも、穴があったようであるが現在では、かなり塞がってしまっている。かつては目立つ穴であったものが、少しずつ塞がっていつていることを示していると考えられる。

次に『名西郡史』の写真と現在の姿を比べてみる。図5aは『高川原村史』の写真、bは同一の角度から撮影した現在の写真、dはbと同じ写真に相違点を書き加えたものである。cは水平方向の角度は変えずに、根の回りの様子が分かるようにやや上から撮影した写真である。ここでも昔と現在とで樹の特徴はよく残っており、『高川原村史』で目立つ乳は現在でも存在しているし、写真の右端に写っている幹に掛けられた小さな祠は現在も同じ位置に掛けられている。しかし、細かく観察すると90年前比べて、1、2、3、6、9の乳や7、8、10の幹が太くなっていることが見てとれる。また、5の乳は90年前にはその存在が確認できないが、現在は目立つ大きさになっている。

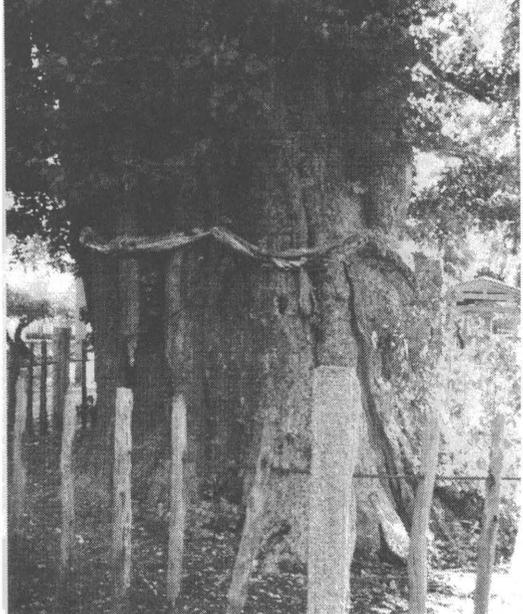
乳の先端部は90年前と較べて形が変わっているものが多い。1は明らかに短くなっているし、2、3、6、9の乳は90年前の撮影の後で切断されていることが明らかに分かる。2、3、9については切断面からまた新たに細い乳が成長している。

このように写真の比較から幹や乳の成長が分かるが、人為的な乳の切断があったこともみてとれる。乳が伐られる理由は、この樹のように乳信仰のあるイチョウにおいて、赤ちゃんが産まれた女性が母乳の出を願って、イチョウの乳を削って煎じて呑むという風習（現在では粉ミルクの普及によりこのような風習は消えてきた）やイチョウの乳が盆栽として珍重されるということが挙げられる。乳の伐採は、好ましいことではないし、天然記念物であればそれはれっきとした犯罪である。

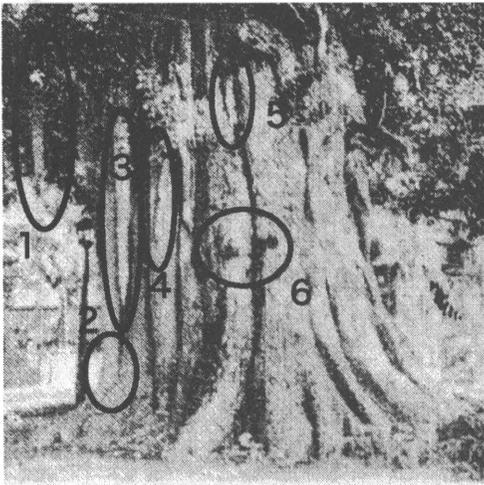
a



b



c



d

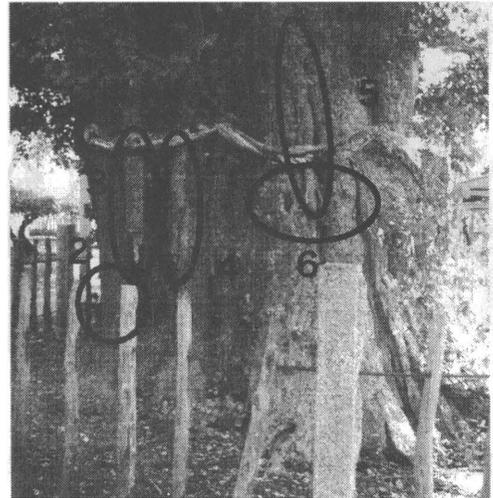


図4. 天神のイチョウの変化（『徳島県老樹名木誌』²⁾と現在の比較）

大正三年（1914）発行の『徳島県老樹名木誌』²⁾に掲載の天神のイチョウの写真（a）を現在の姿（b、平成十八年（2006）8月23日撮影）と比較した。写真c、dはa、bとそれぞれ同じ写真であり、比較可能な部分を楕円で囲って示した。

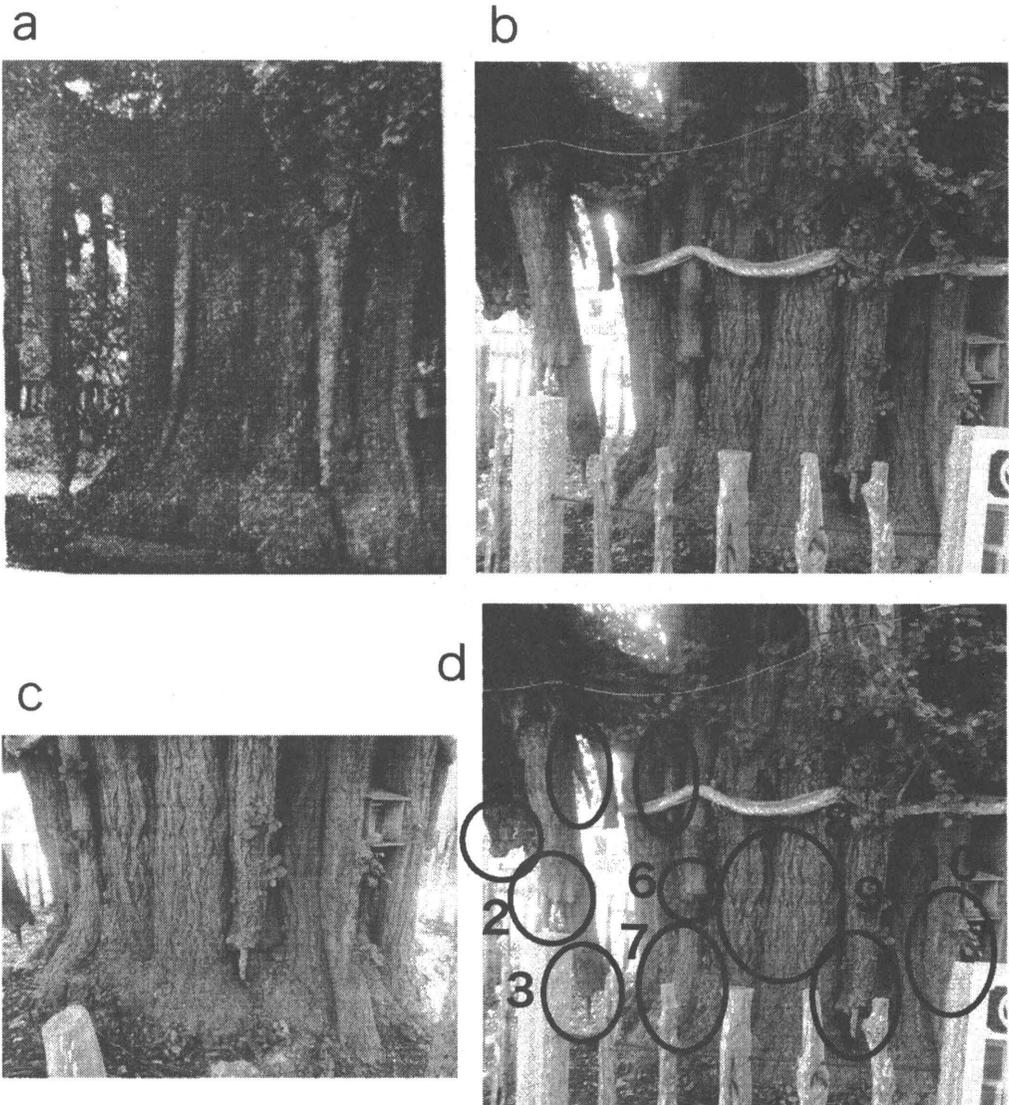


図5. 天神のイチョウの変化（『名西郡史』⁶⁾と現在の比較）

大正五年（1916）発行の『名西郡史』⁶⁾に掲載の天神のイチョウの写真（a）を現在の姿（b～d、平成十八年（2006）9月9日撮影）と比較した。dはbと同じ写真に乳柱の番号を付記した。cは根元の辺りが分かるように多少上から撮影している。

6. ライバルイチョウ

矢神のイチョウ、天神のイチョウはともに大正時代から記録が残っている。江戸期の資料で『阿波志』は、昨年度に報告した矢上の大クスのように少数ではあるが巨樹が紹介されているが、中には含まれていない。大正三年（1914）の『徳島県老樹名木誌』や「徳島県老樹名木番附」によると幹周囲は共に 9.1 m で、相当の大きさの巨樹であり番附でも上位である。『徳島県老樹名木誌』に載っている天神のイチョウの写真も、現在の姿とよく似ており、乳が発達した奇観である。大正期よりずっと以前から立派な樹であったと思われる。ではこれらの樹の樹齢はどれくらいになるのであろうか。樹齢を知るためには、信頼できる植樹の記録が残っているか、年輪測定によるしかない。植樹の伝説は上に述べたようにまったく信用できないし、年輪測定は幹を伐採しなくても細い管を幹に挿す方法があるのだが、測定できる長さに限界があり、この二本のイチョウに関しては幹の中心部に届かないため、正確な測定は無理である。イチョウは成長が早い樹種である。徳川家光が植えたと伝えられる芝東照宮のイチョウは、植樹記録として信頼できると思われるが、350 年で幹周囲 6 m に成長したことになる。しかし、成長速度は環境による差が大きいし、乳が発達すると下垂した乳が主幹と融合して幹周囲が一気に大きくなることもあり、個体差が大きく、幹周囲から樹齢を計算することには無理がある。従って、この 2 本のイチョウの樹齢は不明であるとするほかない。

幹周囲が 10 m を超える巨樹イチョウが近隣に存在し、しかも両者には菅原道真と那須与一という歴史上の有名人にまつわる植樹伝説があるのは大変面白い。地元の古老であり文化財保護審議会委員や天然記念物巡視員をされている荒川福市氏の話によると、新宮本宮両神社と天満神社とでは、それぞれの神社を祀る地域の間に対抗意識があり、一方の祭の日が晴天になるともう一方の祭の日は雨になると称していたそうである。巨樹イチョウの存在もその対抗意識の形成に関わっていたことだろう。那須与一や菅原道真に絡めたイチョウの伝説もこのような対抗意識から生まれたものかもしれない。そう考えると、伝説の内容にも対抗意識が隠されているようにも思われてくる。というのは、天神のイチョウは菅原道真の時代に植えられたとし、矢神のイチョウは那須与一が矢を当てたとすることから、真偽は別として伝説の内容自体は矢神のイチョウの方がずっと後の時期である。しかし、天神のイチョウがその時に植えられたとしているのに対して、矢上のイチョウは、矢が当たったということから周囲に抜きんでた大木であったことを想像させ、それはすなわち那須与一の時代よりかなり以前から樹が存在していたことを意味する。従って、二つの伝説からは、どちらの樹が古いかということはいえないものとなっているのである。

繰り返すが、これらの伝説は史実ではなく後世の創作であることはほぼ確実である。しかし、このように面白い伝説があることは大変貴重である。現在、この 2 本の巨樹イチョウは県天然記念物として保護されているが、樹自体を守るだけでなく、このような歴史や伝説を整理し残すことも樹の文化の継承していくうえで重要であり、本論文がその一助となることを願うものである。

最後に樹の調査にあたり新宮本宮両神社ならびに天満神社の宮司である富崎民夫氏には、資料の提

供、実地調査の許可等ご協力いただきましたことを深く感謝いたします。また、調査にご協力いただいた大山寺住職塩田龍瑛氏、石井町文化財保護審議会委員荒川福市氏、石井町教育委員会吉岐一哉氏にも深く感謝いたします。また、本研究は徳島大学共通教育の創成学習の一環として学生とともに行った。調査に協力してくれた牛田浩貴、神足昌人、森本真理、森上桂彦、黒川俊也、各氏に感謝いたします。

註

- 1) 藤原之憲『阿波志 卷之四』文化十二年(1815)(徳島県立図書館所蔵の1991年版を参照した)。なお『寛保御改神社帳』(東大史料編纂所所蔵)の頭注にも同様の記載があり、『阿波志』より古いと思われなくもない。しかし、東大本は明治元年の謄写本で、同2、3年に本文校合の際、頭注が付されたことが奥書に書かれている。その頭注は『阿波志』から引用されたと判断できるので、結局『阿波志』がもっとも早い史料となる。
- 2) 徳島県山林会『徳島県老樹名木誌』大正三年(1914)。1-2頁。
- 3) 徳島県山林会「徳島県老樹名木番附」大正三年(1914)。
- 4) 近衛道嗣『愚管記(後深心院閑白記)』、永徳元年(一三八一)十月七日の日記に庭の「銀杏」について記されている。
- 5) 堀輝三、堀志保美『写真と史料が語る総覧・日本の巨樹イチョウ』、内田老鶴圃、平成十七年(2005)。194-200頁。
- 6) 『名西郡史』大正五年(1916)。編集:徳島県名西郡役所、(昭和48年に臨川書店発行から『名西郡誌』として復刻されている)。天満神社については213頁、新宮本宮両神社については261-262頁に記されている。
- 7) 高知営林局編集発行『四国老樹名木誌 上巻』、昭和三年(1928)。79-82頁。
- 8) 徳島県編集発行「徳島県報 第二八〇九号」、昭和二八年(1953)。486頁。
- 9) 高原村史編纂委員会編集発行『高原村史』、昭和三一年(1956)。245-247頁。
- 10) 高川原村史編纂委員会編集発行『高川原村史』、昭和三四年(1959)。247-250頁。
- 11) 『阿波名木物語』横山春陽、徳島新聞出版部、昭和三五年(1960)。159頁。
- 12) 徳島県編集発行「徳島県報 第三九一四号」、昭和二八年(1953)。486頁。
- 13) 井上銀晴編集発行『徳島の文化財 1969』、昭和四四年(1969)。132頁。
- 14) 徳島県教育委員会編集発行『文化財読本』、昭和四七年(1972)。137頁。
- 15) 湯浅安夫『名西の伝説』、小山助学館、昭和五二年(1977)。37頁、74頁。
- 16) 徳島県神社庁教化委員会『徳島県神社誌』、徳島県神社庁、昭和五六年(1981)。177頁。

- 17) 阿波学会「総合学術調査報告 石井町」郷土研究発表会紀要第32号、徳島県立図書館、昭和六一年(1986)。10 頁、210～212 頁。
- 18) 石井町史編纂会『石井町史 上巻』、徳島県名西郡石井町、平成三年(1991)。79 頁。
- 19) 栃木県立博物館編集発行『那須与一の歴史・民俗的研究』、平成三年(1991)。52～54 頁。
- 20) 徳島県教育委員会編集発行『徳島の文化財』、平成四年(1992)。317 頁。
- 21) とくしま森とみどりの会編集発行『阿波の巨樹巡り』、平成十六年(2004)。17 頁、19 頁。
- 22) 山中耕作編『天神伝説のすべてとその信仰』、太宰府天満宮、平成四年(1992)。198～206 頁。